

宝眠る山里

過疎の針畑郷から



●●5

「滋賀県も多くの限界集落を抱えており、早急な対策が求められる」。十二日、十二月定例滋賀県議会の県議の一人は、過疎高齢化が進んだ「限界集落」への対策を急ぐよう県当局に訴えた。

競争原理の重視、地方交付税の大幅削減など、小泉政権による構造改革は都市と地方の格差を広げたといわれる。特に中山間地では過疎高齢化が止まらず、政府や自治体は今、その手当てを迫られている。

五年には三十二カ所に増えた。来年度はさらに実態を調査し、どのような施策が必要か検討するという。

行政が過疎地を放っておいた訳ではない。むしろ針畑郷を見ても、道路の整備や公営住宅の建設、市営バスの運行、光ファイバー網と携帯電話アンテナ基地局設置など、さまざまな手を打ってきた。「インフラ(社会資本)は整備したが、それでも人が減っている(高島市政策調整課)。

これまでの地域活性化に欠けていたものに、行政は目を向け始めている。それは、住民自身の「やる気」を引き出すことだ。

二十日、針畑郷にある交流センターに、各集落の代

活性化を目指す協議会に集まった地元区長たち。地域再生には住民の「やる気」が欠かせない(高島市・針畑山村都市交流館「山帰来」)

やる気



地域活性化のカギ握る

表と県、市の担当者、学識者が集まった。地域活性化を目指す協議会の話し合いは、この日で二回目を迎えた。

高島市企画部の榊藤正彦次長が地元の代表に語りかけた。「行政がどうしようではなく、皆さんから『こんなことをやろう』と提案してほしい」

針畑郷は小川、平良、桑原、古屋、中牧、小入谷、生杉、能家の八集落から成る。うち六集落が高齢化率50%を超える。「二十年前ならともかく、もう遅い」。行政主導で立ち上げた協議会に対して、地元からは消極的な声も漏れていた。

行政側はこの日、ある話し合いの開催を提案した。地元の人、そして地元以外の人をも招いて、針畑の魅力

を発掘してもらう作業だ。県の担当者は「生杉のフナ林や小入谷の雲海は都会の人を引きつけている。外の目で見ること、地元の人もこの地域の下さに気づくのでは」と説明した。

協議会の座長を務める星野敏・京都大教授(農村計画)は、「時代の波の前に、針畑の人たちは誇りを失っているように見える。活性化の絵を描くことは簡単だが、実際に動かすためには、住民の自信とやる気が欠かせない」と話す。

地域一体の取り組みが動き出すのかどうか、まだ不透明だ。だが、桑原の区長西沢明さん(60)は真剣はまなざしを見せた。「高齢化が進む今、これが最後のチャンスだ」。再生への機運は、生まれつつある。